謹 呈

『西行学』第２号（発行）西行学会 2011 年８月 20 日

【研究論文抜刷】

西に行くということ
～義清（西行）出家と四天王寺～

山 村 孝 一

◆この論文について　　山村　孝一

西行に私が興味を持ったのは、「西に行く」という奇妙な名前がきっかけだった。20代のはじめ、1年間の英国生活を終え帰国すると、それまで以上に日本文化に興味が出てきた。そこで、茶道や書道などの手習いを少し始めた。

書道は作家の藤本光城先生（1906～　）に習った。書道の練習よりは、毎回先生の語られる話が面白かった。その先生が繰り返し言っておられたのは、「西行は面白い」ということだった。実は、西行という名前は、子供の頃の記憶に残っている。生まれ育った大阪市東淀川区には江口の君堂があり、なんとなく名前は知っていたのだ。面白いと言われ、ちょっと調べてみると、若くして、家族も財産も地位も名誉も捨てて出家したという、その人生に興味を引かれた。

外国人に日本語を教える日本語教師になるため大学に3年編入したのは、その後だった。それなのに、卒論のテーマに西行を選んだのは、その名前と生涯に関心があったからだ。しかし、西行の伝記研究はすでにやり尽くされたという状況で、国文学の勉強を始めて1年と少々の身には入り込む余地はなかった。そんな時、西行の心友西住を知った。「西に住む」という名前も面白かった。その時の卒論が私の最初の研究論文となった。〔西住と西行（『和歌文学研究 第53号』1986年10月30日）〕

それから20数年経ち、千里金蘭大学生涯学習センターで「西行の生涯と時代」という講座を持つことになった。それまで西行研究から少し離れていたのだが、これをきっかけに再度勉強しなおすことにした。

西行はなぜ出家したのだろう。自問自答した時、以前、徒然草の論文を書いた時に引用した『発心集』の説話との類似性に気付いた。西行の出家には理由などなかったのだ。理由もなく一途に出家したからこそ、世人の称賛を得たのだ。新発見に欣喜雀躍したのも束の間、五味文彦氏がすでに指摘されていることがわかった。

意気消沈して数か月、ある日、ふと、出家に理由がなくとも、きっかけはあったはずだということに気付いた。『発心集』の説話は東大寺の大仏供養がきっかけだった。西行にも何かあったはずだと、西行出家の保延6年（1140）という年を調べてみた。すると、僧西念が四天王寺西門から入水往生をしたという記述が目に入ってきた。西行と西念、名前も近いし、調べてみると思想的に近いものもあった。

それまで、大阪生まれでありながら、四天王寺がどういう寺か意識したことはなかった。まして、四天王寺西門が極楽の東門と向かい合っているなんて話は、全く知らなかった。「西に行く」と書いて西行。では、西に行くとは、どこから行くのだろう。そう考えた時、西行と四天王寺西門信仰との関連性が強く感じられた。

この論文は、そういう発見の連続にわくわくしながら書いたもので、論理的、客観的に見ると、卵の上に卵を積み重ねたような危うさがある。前提となる仮説が崩れると、すべてが崩れてしまう。しかし、西行を文学研究の対象として見るようになった明治以来、西行と四天王寺について真っ正面から研究した人はいない。そういう意味からも、この論文が新しい研究領域を拓く一里塚となってくれたら嬉しい。

研究論文

西に行くということ
――義清（西行）出家と四天王寺――

山村孝一

キーワード
義清（西行）出家　四天王寺　西門信仰　菩提心　西念

はじめに

鳥羽院の北面武士であった佐藤（藤原）義清（のりきよ）は、保延六年（一一四〇）出家して西行と号する。「西に行く」と書いて西行、その名前に、西、即ち西方（さいほう）浄土に行くという浄土思想が表れているのは自明のことである。「西行」とは、出家して極楽浄土に往生するという義清の強い気持ちが込められた名前である。しかし、彼がなぜ出家したのか、その理由は定かでない。

そこで、本稿では、まず義清（西行）出家の動機から論を起こす。さらに、西行という名前と四天王寺西門（さいもん）信仰との関連を推測し、従来の西行伝記研究に欠けていた、西行と四天王寺について考察してみようと思う。

一　義清（西行）の出家について

義清（西行）出家を記す根本史料は、藤原頼長の日記『台記』である。その永治二年（一一四二、ただし四月二十八日改元で康治元年）三月十五日条を引用する（注★1）。

十五日戊申。侍共をして弓を射しむ。西行法師来りて云はく、「一品経を行ふに依りて、両院以下の貴所、皆下し給ふ也。料紙の美悪を嫌はざれども、只自筆を用ふべし」と。余、不軽を承諾す。又余、年を問ふ。答へて曰はく、「二十五なり。去々年出家す、二十三。」と。そもそも西行は、本兵衛尉義清なり。左衛門大夫康清の子。重代の勇士を以つて法皇（鳥羽）に仕へ、俗時より心を仏道に入る。家富み、年若く、心に愁無きに、遂に以つて遁世す。人これを嘆美するなり。

この記述から、西行について、以下の七点が確認できる。

一、保延六年（一一四〇）に二十三歳で出家したこと。
二、俗名が「義清」で、在俗時「兵衛尉」であったこと。
三、父が左衛門大夫康清であること。
四、その家系が「重代の勇士」ということで、鳥羽法皇に仕えていたこと。
五、俗時より仏道に熱心であったこと。
六、家が豊かで、年も若く、心に何の煩い（悩み）もなく出家したこと。
七、義清（西行）の出家を世人が嘆美したこと。

当時、頼長は義清出家時と同年の二十三歳で、内大臣として政務の中枢に参画していた。この日、西行が訪ねたのは、頼長が婿入りしていた藤原実能の大炊御門高倉邸であった（注★2）。西行来訪の目的は、前月の二月二十六日に落飾した待賢門院のための結縁経勧進と考えられている（注★3）。

藤原実能は待賢門院の同母兄で、西行にとっては、在俗時に家人として仕えた人物でもある。その邸宅に婿として暮らす頼長に、西行は『法華経』「常不軽菩薩品」の自筆書写を依頼し、承諾を得ている。

他に義清（西行）出家を伝える史料としては、『百練抄』保延六年（一一四〇）十月十五日条がある（注★4）。

佐藤右兵衛尉憲清出家す。年二十三。西行法師と号す。

『百練抄』は十三世紀末成立とされる後代の史料であるが、『台記』と同じく憲清（義清）「保延六年」出家を伝えている。

これまで義清（西行）出家の原因・理由については、前出の史料や西行の和歌、後世の説話、物語などを用い、様々な説が披露されている。以下は下西善三郎が挙げたものである（注★5）。

(1)一般厭世説〔川田順「西行伝」〕
(2)恋愛原因説〔川田順「西行伝」〕
(3)政治原因説〔川田順「西行伝」〕
(4)複合原因説〔川田順「西行伝」〕
(5)北面の生活に失望せしこと〔川田順「西行伝」〕
(6)仏家隠者に対する感傷的憧憬の心〔伊藤嘉夫『歌人西行』〕
(7)よりよき生き方をしたいという、人間の純粋な希望・要求〔窪田章一郎『西行の研究』〕
(8)草庵への憧憬〔久保田淳『西行　長明　兼好』・同『新

古今歌人の研究』）

(9)数奇の遁世の伝統（目崎徳衛『西行』・同『西行の思想史的研究』）

(10)萩原昌好による従来説の簡潔なまとめと批判（「西行はなぜ出家しなければならなかったのか」（『国文学』一九八一年六月））

(11)男色環境遠因（目崎徳衛『数奇と無常』）

このように多様な説が存在する現状は、結局、山木幸一が言う「西行の出家した理由・原因は、ついに実証されえぬ謎というほかはない（注★6）」を端的に表している。

近代的合理主義に慣れ親しんだ我々現代人にとって、すべての出来事には何らかの原因・理由があり、それなくしては何ごとも起こらないと考えがちである。それゆえ、義清出家にも、さぞ世を厭うわけがあったのだろうと推測を巡らせてしまう。

しかし、頼長が「家富み、年若く、心に愁無き」と言ったように、義清は世間が出家の原因・理由と考える経済的困窮状態でもなく、世をはかなむ老人でもなく、悩みを抱えた人でもなかった。そういう人が敢えて出家したことが、当時の人々の耳目を集め、その名を挙げることとなったのではないだろうか。

この義清（西行）出家譚とよく似た話がある。鎌倉初期に鴨長明が記したという『発心集』巻七「斎所権介成清が子高野に住む事」である。以下、要約して紹介する（注★7）。

尾張国の斎所権介成清（さいしょごんのすけなりきよ）の嫡子は若くして発心し、重源の弟子となった。彼は裕福な家に生れ、愛すべき妻子もあり、誰が見ても恵まれた人生を送っていたのだが、重源上人の大仏供養の年（注★8）に東大寺に詣で、強く道心を発し、ある日、突然、誰にも告げず、ひとり重源のもとに行き、弟子入りを志願する。

ところが、重源はまだ年も若く将来のある若者が、なぜ出家を渇望するのか不審に思い問い質す。すると、男はこう答える。

身に取りては殊事も侍らず。親ゆたかなれば、心に叶はぬ事もなし。資材もあり。田園もあり。さりがたき妻子を持ちて、かたがた思ひたつべき身にも侍らねども、世の無常を思ふに、何事もよしなしと思ひ侍れば、ただ身命を仏道に投げて、仏の悲願をたのみたてまつらんばかりこそ賢からめ

親が豊かで何でも思いのまま、財宝も田地もあり、愛しい妻子もいる。若く将来を嘱望される彼自身の境遇からは、何ら発心すべき特別な理由は見当たらない。しかし、世の無常を思うにつけ、ただ一心に仏道に身命を投げることを願う男の言葉に感動した重源は、次のような賛辞を述べる。

此れ等に、弟子と名付けたる聖、その数侍れど、すずろに世を捨てたる人はなし。或いは主君のかしこまりを蒙り、或いは世のすぎがたき事を愁へ、或いはかなしき妻におくれ、或いは司位に付けて世をうらみなど、様々心にかなはぬを、其れを次としてのみこそ世を捨つる習ひにて侍れば、

其の事忘れなん後は、道心もいかがと危ふく侍るを、聞くがごとくならば発心にこそ、仏も必ずあはれとかなしみ給ふらめ。いといとありがたき事なり

重源は、自分には弟子が数多くいるが、その一般的な出家の契機は、主君の怒りに触れての蟄居、生活苦、愛する人の死、不遇による厭世など、世俗的な憤懣、悲嘆という鬱屈した心情（愁え）から発するものであると言う。しかし、このような道心は、やがてその激情がおさまるにつれ、自然と弱まる。

ところが、この尾張の若者は、家も豊かで何の煩いもないのに、「世の無常を思ふに、何事もよしなしと思ひ侍れば」と、純粋な無常観から、「すずろに（一途に）」出家を願い出た。それを重源は評価し、褒めたたえたのである。

この説話の主人公と義清（西行）とを重ね合わせると、

一、家が豊かで年も若く、心に何の煩いもなく、特に理由もなく出家したこと。

二、出家を人が嘆美したこと。

という共通点が見い出せる。

このように、現世での何不自由ない生活を十分謳歌することができるのに、それらを全て捨て、ひたすら仏道を求めて出家したからこそ世間は評価し、嘆美するのである。これこそ義清（西行）出家を、「人これを嘆美するなり」と世間が評価した理由であろう。義清出家に世俗的な原因・理由などあってはいけないのである。

実は、この『発心集』説話をもとに、義清（西行）出家無原因説とも言える説は、すでに吉本隆明（注★9）、五味文彦（注★10）などから提唱されている。しかしながら、私は出家の原因を無しとするよりは、そのもとは、ひたすら仏道を求める心である菩提心からであったと解し、「菩提心説」と呼んでみたい。

二　菩提心による出家とそのきっかけ

義清（西行）の出家を「菩提心」によるものと推察したが、菩提心による出家例は、同時期他にもある。管見では、以下のように、『公卿補任』に四例見いだせる（注★11）。

(1)承安四年（一一七四）参議正三位藤原成頼（三十九）
　正月五日出家（依菩提心也。光頼卿一回）
(2)正治元年（一一九九）参議正四位下藤原定経（四十四）
　（正月）十五日出家於天王寺出家。依菩提心也。
(3)正治元年（一一九九）散位従一位藤原兼房（四十七）
　六月十八日出家。依菩提心也。
(4)元仁二年（一二二五）権大納言正二位藤原教家（三十二）
　九月三日出家。（依菩提心也）。

※以下、傍線は私に付した。

『公卿補任』には「依病出家」という理由が散見できる。ところが、右の四人はいずれも三十代、四十代の壮年で、身分も

従一位から正四位という高位の人々である。その彼らが病気ではなく、菩提心によって出家している。

院政期に平康頼が記した『宝物集』（巻第四）には（注★12）、

第一に、道心をおこし、出家遁世して仏道をもとむべしと申は、たしかの往生の因なり。…中略…道心といふは、菩提心なり。菩提心と云は、大悲の心なり。千手陀羅尼経に、大悲心といふ則これなり。…中略…一念菩提心をおこす功徳、百千の堂をつくるにすぐれたり。いはんや、ながく道心をおこして、仏道をもとめん人をや。

とある。菩提心によって出家した功徳は、多くの仏堂を造る功徳をも上回るという。これらを勘案すると、義清（西行）も道心をおこし、菩提心によって出家したからこそ世人から嘆美され、頼長もわざわざ言葉を交わし、記録に残したのではないだろうか。

西行が在俗時から仏道に関心を持っていたことは、家集『聞書残集』所載（二二～二三番）連歌からも確認できる（注★13）。

いまだ世遁れざりけるそのかみ、西住具して法輪にまゐりたりけるに、空仁法師、経覚ゆとて、庵室に籠りたりけるに、物語り申して帰りけるに、舟の渡りの所へ、空仁まで来てなごり惜しみけるに、筏の下りけるを見て　空仁

ⓐはやく筏はここに来にけり
薄らかなる柿の衣着て、かく申して立ちたりける、優に覚えけり

ⓑ大井川上に井堰やなかりつる
かくて、さし離れて渡りけるに、ゆるゝある声の嗄れたるやうなるにて、大智徳勇健、化度無量衆と読み出したりける、いと尊くあはれなり

ⓒ大井川舟に乗り得て渡るかな
西住付けけり

ⓓ流れに棹をさす心地して
心に思ふことありて、かく付けけるなるべし

西行とその同行として名高い西住（源季政）は、二人して出家前に嵯峨嵐山東麓にある法輪寺を訪問する。そこで仏道修行に励む空仁（注★14）を見て、義清（西行）は「優に覚えけり」と感嘆の念を抱く。その時交わした季政（西住）との連歌で義清は、渡し船に乗って川を渡ることと、仏法を得て悟りの彼岸に渡ることをかけ、出家の決意を述べる。それに呼応して季政も、「流れに棹をさす心地」と、出家に逸る心情を吐露する。

このように、義清（西行）が出家する意志を早くから持っていたことは推察できる。それが保延六年に至って出家という行動に突如として踏み切るには、何らかの切っ掛けがあったはずであろう。前出の『発心集』説話では東大寺の大仏供養が切っ掛けとなっている。この点について五味は、瞻西（？～一一二七）に注目している（注★15）。

『百錬抄』天治元年（一一二四）七月十九日条に（注★16）、僧

瞻西が金色の八丈阿弥陀如来像(約24メートルもの大仏)を造って雲居寺に安置し、堂を証応弥陀院と名付けたという記録が残っている。雲居寺は八坂神社の南、現在の高台寺あたりにあったという。元永元年(一一一八)生まれの義清(西行)七歳の頃の話だ。その三年後の大治二年(一一二七)に瞻西は亡くなるのだが、五味はこの瞻西がきっかけで義清(西行)が出家したのではと推測している。その根拠は次の二点である。

一、歌道と仏道との一致を説き、その勧進を行なった瞻西と西行の生き方に通じるものがあること。

二、雲居寺のあった東山は西行が慣れ親しんだ場でもあったこと。

確かに、西行が瞻西の流れに連なっているということは、山田昭全、目崎徳衛などにも同様の指摘がある(注★17)。また、『新古今和歌集』の巻末(巻二十、釈教歌)を飾る西行歌の前に、瞻西の歌が置かれているのも、両者の近さを新古今編者が理解していたとも言えるだろう(注★18)。

しかしながら、西行に影響を与えたのは瞻西一人に限らない。目崎が、「数奇に遊びたい心に駆られて俗世間を離脱しようとして遁世に方途を求めた者の系譜が、長くかつ次第に広がって西行におよんだ(注★19)」と捉えたように、その影響は瞻西一人に限定できるものではない。また、なぜ保延六年(一一四〇)に、義清(西行)は全てを捨てて出家しなければならなかったのか、瞻西が切っ掛けでは説明がつかない。

そこで、再度、保延六年(一一四〇)という年に注目してみた。この年に義清(西行)に大きな影響を及ぼすような事件はなかったであろうか。そこで注目されるのが、僧西念が出家し、四天王寺西門より西海に向かって入水したという記録である。

義清(西行)と同じ年に出家したという年代の相似性、また、西行と西念という名前の相似性。そして、なにより四天王寺の西門から入水往生を試みたという、そのセンセーショナルな行動は、まさに「西に行く」ということ、そのものである。

こう考えると、西念が義清(西行)に何らかの影響を与えた可能性も否定できない。西念は、日記や歴史書、あるいは往生伝や仏教説話集に見ることができず、西行との関係は定かでない。しかし、何らかの接点があったと仮定し、調べてみた。

三　西念について

西念について『国史大辞典』は次のように記す。

(生没年不詳)平安時代後期の浄土信仰者。曾我部または藤原氏の出自と思われるが、俗名・身分などは不詳。保延六年(一一四〇)三月三日に出家し、過去四十年間の供養目録を携え、同年四月九日難波の四天王寺の西門から入水自殺を試み、二年後の康治元年(一一四二)三月十七日、自邸内に葬穴を掘り、極楽往生を祈願し、同年六月二十一日極楽願往生歌(四十八首)を詠じ、以後消息不明。明治三十九年(一九〇六)十一月京都市下京区松原通大和大路

東入ル小松町四七五番地（東山区小松町）の地下から西念自筆の二種の供養目録と極楽願往生歌一巻が出土し、これにより熱狂的な浄土願生者の行業が明らかとなった。四十二年間にわたる多量の写経・造仏・読経・僧供などが記され、『法華経』を中心とした雑信仰や比叡山以下、日吉社・六波羅蜜寺・鞍馬寺・四天王寺・熊野・加賀白山など天台宗系寺社への供養がみられる。これらの全文は『平安遺文』一〇に翻刻されている。（平林　盛得）

この西念が、保延六年に四天王寺西門から入水自殺を試みた事件について、史書は何も記さない。以下、帝室博物館の報告書[注★20]をもとに、西念について見ていきたい。

明治三十九年（一九〇六）十一月、京都市下京区（現東山区）松原通大和大路東入小松町四七五番地で、所有者の藤井利右衛門氏が土砂を採掘していて、地下三尺（九〇センチ）ぐらいの所で、約二貫目（七・五キロ）の天然石四個の間から、以下の物を発見した。

①保延六年（一一四〇）八月九日付「紺紙金字供養目録」一巻
②永治二年（一一四二）三月十七日付「白紙墨書供養目録」一通
③康治元年（一一四二、永治二年四月二十八日改元）六月二十一日付「白紙墨書極楽願往生歌」一通
④青銅製磬（仏具）残片、一個

ただし、報告書によると、これらの遺物は藤井氏が明治三十九年に発掘した後、明治四十三年（一九一〇）三月に京都府から帝室博物館に報告があり、同年十月に藤井氏から博物館に寄贈されたものだという。また、

四個の大石を以て囲まれたる中に、紺紙金字の目録に他の二通を巻き込みてありしといふに過ぎず。是等の文書が能く水土の浸食を免れて今日に至るまで其の形質を保存せるは、必ず密閉せる容器の内に在りしが為なるべしと思はるれども、其の容器については何等報ずる所なし。恐らくは発掘の際破損遺棄せられしものなるべし。

ということも記されている[注★21]。つまり、発掘の詳細、発掘品の全貌、発掘後数年の保管先は不明で、報告書も、「発掘の当時より本館の所蔵に帰するまで、前後五年の間何人の手に保管せられたりしか審かならず」と記している。したがって、この四点以外にも遺物があった可能性も十分考えられるが、今となっては手がかりすらつかめない。

さて、①・②の供養目録には、西念が四十余年間に行なってきた経典の読誦・書写・印刷、仏像の図絵・彫刻・堂舎の建立、法衣・供米等の施入、卒塔婆の造立など、厖大な供養事業の概要が列挙されていた。

③極楽願往生歌は、片仮名で書かれた四十八首の釈教歌と巻末の漢文序からなっている[注★22]。そのうち四十七首は、

㋑色々の花を摘みては西方の弥陀に供へて露の身を悔い
㋺ろくろくに巡り会ふとも法の道絶えで行へ釈迦のこのころ
㋩儚しや此世の事を急ぐとて御法の道を知らぬ我が身は
から始まって、
㋬切にただ極楽願ふ我なれば終らむ時は仏来らせ
㋣すべて皆仏のことを思ふ人遂には法の道に惑はず
で終わっている。すべてイロハ四十七字を歌の最初と最後に置き、一心に極楽往生を願うものであった。

西念がこのような和歌を作った理由は、極楽願往生歌の序文に記されている(注★23)。

> 敬みて白す 極楽願往生和歌序に云はく。蓋し聞く、和歌は仏神の道を哀れみたまひ、後世の菩提を叶ひ給ふ道也。其れ三十一字の和歌の数、四十八行を注連し、偏に後世の菩提を意に懸け、家中往生の地に穴を儲け、命終入滅して与に寝宿せむ。…以下略…

和歌が後世の菩提を叶える道であると強く信じていたからこそ、西念はイロハを歌の頭尾に置く四十七首を仏に手向け、極楽往生を請い願ったのである。これは、先に、五味が義清（西行）出家のきっかけとして瞻西を挙げ、その根拠として、瞻西が歌道と仏道の一致を説いたのと軌を一にしている(注★24)。

また、晩年ではあるが、西行も神護寺を訪れ、若き日の明恵に次のような話をし、歌道と仏道の一致を説いたという(注★25)。

> 西行上人常に来たりて物語して云はく、「我歌を詠む事は遥かに世の常に異なる也。花、郭公、月、雪すべて万物の興に向ひても、凡そ、所有相、皆これ虚妄なる事、眼に遮り、耳に満てり。又、読み出す所の歌句は皆これ真言に非ずや。…中略…この歌は、即ちこれ如来の真の形体なり。されば、一首詠み出だしては一体の尊像を造る思ひをなす。一句を思ひ続けては、秘密の真言を唱ふるに同じ。我、この歌によりて法を得ること有り。…後略…

後世の伝聞資料ではあるが、西行も、歌語はすべて真言であると説いたという。以上のように、西行と西念は、時代、名前、思想と近いものがある。その西念は、熱烈な四天王寺西門信仰者であった。これは①・②の供養目録から明白である。たとえば、①保延六年供養目録には次のような文言がある(注★26)。

> 弟子僧西念、跪きて礼拝合掌して仏に白して言はく、天王寺の西海に身を投じ、海に入らしむるの条、往生の赴、願ひ斯に有り。伝へ聞く、天王寺の西門は極楽の東門に通ずと…以下略…

西念はこの供養目録を首に掛け、天王寺の西方海上に舟を出して入水自殺を図ったが、叶わなかったという。「天王寺の西門は極楽の東門に通ず」という文言は、この二年後に書かれた

②永治二年供養目録の中にも見いだせる（注★27）。

西方浄土に往生することを念じる西念にとり、極楽の東門に通ずる四天王寺西門は、極楽往生への標として特別な場所であった。となると、同時代に生き、西行と号し、同じく西方浄土に行くことを念じる西行にとっても、西門は特別な場所であったと仮定することはできないだろうか。そこで、まず、院政期の四天王寺と西門信仰についての考察から始めたい。

四　院政期の四天王寺と西門信仰について

西行が生きた院政期、「四天王寺西門」こそ極楽浄土の入口であった。その頃流行った今様にこのようなものがある（注★28）。

極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対へたる、転法輪所の西門に、念仏する人参れとて。（『梁塵秘抄』一七六番）

釈迦が説法をした所（転法輪所）という伝承（注★29）のある四天王寺、その西門の先には海が広がり、当時は極楽の東門と向き合っていると信じられていた。そのため西門付近には往生を願う人々が集い、ここから西念のように入水往生を遂げようとした人々までいたという（注★30）。以下、井上光貞（注★31）、出口常順（注★32）、田中文英（注★33）の論考に導かれ、四天王寺と西門信仰について考察してみたい。

聖徳太子創建と伝わる四天王寺は、律令時代、朝廷の手厚い保護を受ける有数の官寺のひとつであった。その後、平安初期、弘仁七年（八一六）に入唐求法後十年の最澄が、天台法華宗将来のことを起請して、四天王寺の聖徳太子廟に参詣・献詩して以来、天台宗の影響が強まっていく。

やがて、天台僧が別当職に補任されるようになると、四天王寺は天台宗の末寺となる。そんな中、摂関期のはじめ、天徳四年（九六〇）三月十七日に四天王寺は焼亡してしまう。しかし、四天王寺はここから復興を遂げる。

長保二年（一〇〇〇）三月に円融院女御の東三条院（詮子）参詣以後、治安三年（一〇二三）十月には藤原道長、長元四年（一〇三一）九月上東門院彰子、永承三年（一〇四八）十月藤原頼通、延久五年（一〇七三）二月後三条天皇・陽明門院禎子、応徳元年（一〇八四）九月藤原師実・師通父子と藤原顕房、大治二年（一一二七）二月白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院と都から皇族・貴顕たちが相次いで参詣するようになる（注★34）。

当時の四天王寺の様子を出口は次のように記している（注★35）。

院政期の四天王寺は、上下あらゆる階層の人々が参詣する太子信仰の霊場として、まさに全盛期を迎えている。ことに、上皇・院宮の相つぐ参籠が見られること、驚くばかりである。白河上皇は、大治二年（一一二七）二月の一度にすぎなかったが、鳥羽上皇十一度、後白河上皇は十三度、後鳥羽上皇は四度の御幸が数えられる。

しかしながら、田中文英によると、これらのほとんどの場合は石清水・住吉参詣とセットをなすか、または高野・熊野参詣

とともにおこなわれたという（注★36）。それが鳥羽院政期になると、四天王寺自体が独自の参詣対象となり、「四天王寺精進」なる沐浴も始められるようになる（注★37）。

このように摂関・院政期に皇族・貴顕の霊場参詣の風潮が高まってくる中、四天王寺は聖徳太子信仰・西方浄土信仰・法華経信仰・仏舎利信仰の中心として、皇族・貴顕・衆庶・道俗の群集する聖地となり、新たな賑わいをみせることとなった（注★38）。これらはすべて「四天王寺御手印縁起」の発見がきっかけであったと言えよう。『日本歴史地名大系』（「四天王寺／四天王寺御手印縁起」の項目）は以下のように記している。

> 寛弘四年（一〇〇七）八月一日、都維那十禅師慈蓮が金堂の六重小塔の中から「四天王寺御手印縁起」を発見した。この縁起は文末に「乙卯歳正月八日　皇太子仏子勝鬘」とあり、文面に朱の手印が押されている。内容は寺名の由来・創建の事情・堂塔の規模・仏像・宝物・寺領などからなる。この縁起で特筆されることは、敬田院すなわち四天王寺の中心伽藍部は昔釈迦如来が法輪を転じた霊地であり、心柱に仏舎利六粒と太子の霊髪六毛を納めた五重塔と百済王が太子滅後に恋慕渇仰して作ったという金銅の救世観音を安置した金堂とが、極楽土の東門の中心に相当するという信仰が盛込まれていること…中略…である。この縁起は聖徳太子自撰の形をとるが、おそらく天徳四年の焼亡後、貴族社会の帰依を失うことなく、さらには成長しつつあった民衆の支持をも得るために、それまでの金光明経に基づく護国思想にかえて仏舎利と救世観音の信仰主旨を提示し、聖徳太子の仏教精神の実践をめざす目的で作成されたものであろう。…以下略…

後代に聖徳太子に仮託して作られた「四天王寺御手印縁起」であるが、ここ四天王寺の地は、昔、釈迦が法輪を転じた（説法をした）霊地で、五重塔と金堂が極楽の東門の中心に相当するということが謳われている。それが、いつしか西門が極楽の東門と向かい合っているというように変わっていく（注★39）。

当時、四天王寺に参詣した貴族たちは、西門で西方浄土に向かって日想観を修し、金堂で舎利供養を行ない、聖霊殿で太子を拝し、経供養を営んだという（注★40）。たとえば、上東門院彰子四天王寺参詣を記録した『栄花物語』（巻第三十一）長元四年（一〇三一）九月二十七日は、次のように書いている（注★41）。

> 酉の時ばかりに、天王寺の西の大門に御車とゞめて、波の際なきに西陽の入りゆく折しも、拝ませ給。何の契にかも残りてと、めでたくこそ。

また、『今昔物語集』（巻第十一、聖徳太子建天王寺語）にも次のような記述がある（注★42）。

> その寺の西門に太子自ら、「釈迦如来転法輪所、当極楽土東門中心」と書き給へり。これに依りて、諸人、かの西門にして弥陀の念仏を唱ふ。今に絶えずして、参らぬ人なし。

これを思ふに、この天王寺は、必ず人参るべき寺なり。聖徳太子の正しく仏法を伝えむがために、この国に生まれ給ひて、専ら願を発して造り給へる寺なり。

もともと四天王寺の地から西方を臨むと、眼下に難波の海が広がり、入日の荘厳は阿弥陀来迎の光景を彷彿とさせるものだったのだろう。井上光貞は、西門を中心とする浄土教の聖跡として尊ばれていた当時の四天王寺信仰を、次の三つに類別している(注★43)。

(1) 四天王寺に詣でて念仏百万遍に満つれば、往生業としてはなはだ功徳があるという百万遍念仏信仰。

(2) 四天王寺に参詣し、金堂舎利の瑞相を見たり、聖徳太子絵像を納める聖霊院に祈念して、太子の霊夢を得たりして往生の安心を得る信仰。

(3) 西日のさす難波の海、すなわち極楽の東門に入水すれば、必ず往生が遂げられるという信仰。

井上によると、いつしか四天王寺の西門は、念仏する人々が集う浄土教上の聖地となり、「念仏衆」と呼ばれる集団も形成されていたという(注★44)。

この念仏衆は、四天王寺浄土教の諸信仰すべてにかかわるものではなく、西門外の念仏所を中心に興行された出雲聖人の百万遍念仏を中心に作られたもので、義清（西行）が仕えた鳥羽法皇や美福門院、あるいは藤原忠実らも加わっていたという。まさに「天皇家や摂関家などのかつての主たちの天王寺信仰は、異常な高揚の真只中にあったと評して差支えなかろう(注★45)」という状態であった。

このような時代を反映し、四天王寺西門も和歌に詠まれるようになる。以下、西門信仰と和歌について触れてみたい。

五　西門信仰と和歌について

管見に入った四天王寺西門を詠んだ和歌を挙げてみる(注★46)。

①相模（相模集一番）
寛弘の御時ばかりにや、天王寺の歌とて人人よむをりがありしに、西大門
極楽に向かふ心は隔てなき西の門（かど）よりゆかむとぞ思ふ

②赤染衛門（赤染衛門集五三〇番）
西大門にて、月のいとあかかりしに
ここにして光を待たむ極楽に向かふと聞きし門に来にけり

③源俊頼（散木奇歌集、雑部上、一三八四番）
或人の堂の障子の絵に、天王寺の西門にて法師の船に乗りて西ざまへ漕ぎ離れて行くかたかけるを、これはとおぼしきなりと堂の主の入道の云ふを聞きて
阿弥陀仏と唱ふる声の楫（かぢ）にてや苦しき海を漕ぎ離るらん

④郁芳門院安芸（郁芳門院安芸集、五六番）
天王寺にて、所々の名、人人よみしを、西門
障りなく入る日を見ても思ふかなこれこそ西の門出なりけれ

⑤行尊（行尊大僧正集、三五番）
　天王寺西門にて
隔てなく西へ行くべき印には迎へる門にまづ（ママ）と入りぬる
⑥源頼政（源三位頼政集、下、六四九・六五〇番）
　※「九月の廿日あまりのほどに天王寺に参りて侍りしに、伊賀入道為業がもとより籠りて侍りけるがかくと聞きて遣したりし（六四三番詞書）」に続き、又これより入道のもとへつかはしける
もろともにいざさはゆかむ極楽の門迎ひする所なりけり
　返し
奥つ浪君さきだててよき海の舟でいそがむ西の門より
⑦慈円（拾玉集、第三、二七五三番）
西へとて迎ふる君を頼む道は難波の寺の御門なりけり
⑧慈円（拾玉集、第三、二七八一番）
極楽とこの津の国とあはれなり普門（あまねきかど）をあけ合せつつ

歌の中で四天王寺西門は、隔てなく極楽に向かう門、西に迎える門として詠まれている（①②④⑤⑦）。⑧歌にある「普門（あまねきかど）」も「観音などが、広く衆生を済度しようとする広大な慈悲の門（『日本国語大辞典』）」ということなので、誰でも極楽往生できる入口として西門は認識されていたようだ。

相模は、①歌で西門から極楽に行こうという気持ちを詠んでいる。②歌で赤染衛門が待とうと言っている光は極楽からの光であろう。西門が極楽に向かっていると信じているからこその言葉だ。③の俊頼歌では、四天王寺西門からの入水往生の様子が障子絵に描かれていることが確認できる。往生伝などを通して、西門からの入水往生は広く知られていたのであろう。

④歌では郁芳門院安芸が人々と日想観を行ない、西門こそ極楽往生の門出と確信した気持ちが詠まれている。⑤歌で行尊はすべての人が極楽へ行けるランドマークは西門であると断言している。いずれも「西に行く」場所は四天王寺西門であるという西門信仰を和歌に詠み込んだものだ。彼らは西行よりも前の時代の人々であり、これらによって西行以前から西門信仰の広がりを確認することができる。

⑥歌は、源頼政と伊賀入道為業（藤原為業、出家して寂念）との贈答歌である。四天王寺は極楽の入口で、西門から舟で急ぎましょうと歌を交わしている。彼らも③俊頼同様の西門から入水往生の絵を見ていたのであろう。

⑦⑧歌の慈円は、⑤行尊同様、四天王寺別当に就いている。その慈円が詠む⑦「西へとて迎ふる君」は、極楽浄土へ導くため紫雲に乗って迎えに来てくれる阿弥陀仏や諸菩薩のことであろう。その信仰がここ四天王寺の西門であるのだと歌っている。⑧歌は「極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対（むか）へたる」という『梁塵秘抄』一七六番を踏まえたものであろうか。「普門（あまねきかど）」が、この四天王寺西門のある摂津の国と極楽とで向かい合って開いていることを想い、感慨を込めた歌である。

以上の時代背景を考えると、当時の人々が「西に行く」ということで、四天王寺西門からの極楽往生を連想した可能性は高い。つまり、「西行」という名も深く四天王寺西門信仰と関係していると考えられる。実際、西行も、①〜⑧歌の流れに連な

るように、西門信仰を詠んだと見られる和歌を残している。

⑨西行（山家集、巻末百首、一五四〇番）
※「千手経　三首」のうち二首目
誓ありて願はん国へ行くべくは西の門より悟り開かん

「若我誓願」と呼ばれる千手観音の誓いは、遍く一切衆生を救おうというものである。その誓いのおかげで誰もがみな、間違いなく極楽浄土へ行けるのなら、その極楽の東門に向き合う四天王寺西門から悟りの境地に入って行こう。そんな西行の決意が⑨歌から読み取れる。この歌に込められた西行の気持ちを考えた時、「西に行く」と書いて「西行」と号した藤原義清の心に、四天王寺西門信仰が強く意識されていたことは確かだろう。では、実際、西行にとって四天王寺とはどのような場所であったのだろうか、

六　西行と四天王寺

院政期の四天王寺の位置について、阿部泰郎は次のように記し、西門信仰の重要性に触れている（注★47）。

道長に始まる天王寺参詣は、摂関から院へと継承され、延久五年（一〇七三）の後三条院参詣より以降は院の領導するところとなる。白河院による熊野詣の盛行も、必ず天王寺を発着の起点とするのであり、広義の天王寺参詣とみてもよい。鳥羽院に至り、再び天王寺を目的の地として、西門の念仏別所に参籠し、出雲聖人の勧進する不断念仏に結縁するための参詣が始まった。かくして、熊野詣と西門念仏という、それぞれに中世をしるしづける大きな意義を担った宗教運動の軸の交わるところに、天王寺は位置しているのである。

四天王寺が当時の社会で重要な地位を占めていたことは、貴顕の参詣だけでなく、次のような事例からも確認できる。

永暦元年（一一六〇）十月十六日、後白河院が新熊野、新日吉の両社を京の都に勧請したが（注★48）、同時期、熊野、日吉同様に都へ勧請され、「イマ（新・今）」を頭に付ける「今天王寺」と呼ばれる寺も造られていた。

予、普成仏院に詣す（今天王寺と号す）。講演を聴聞す。随喜の涙、不覚にも禁ぜず。予、講衆に入ぬ。毎年一度、その月を定めず、十五日を以て式日とすべきの由、約束し了ぬ。念仏五万遍の外、勤なし。また、先考、先妣を過去帳に入れ奉り了ぬ。聊か所課あるべしと云々（注★49）

『吉記』承安三年（一一七三）六月十五日の条である。著者藤原経房が参詣し、五万遍念仏を勤行したという普成仏院（普成仏名院）は、美福門院が自身の後世菩提のために建立した寺院であった（注★50）。『日本歴史地名大系』には、

永暦元年（一一六〇）一一月二日の美福門院庁下文（国立歴史民俗博物館蔵醍醐寺文書）によれば、美福門院（鳥羽天皇皇后、藤原得子）が普成仏名院（仏名院、山城醍醐寺子院）に「摂津国野鞍庄」を施入し、同女院の後世菩提のため聖心を阿闍梨として仏眼護摩を修させた。

とある。このように、新熊野、新日吉とほぼ同時期、永暦元年（一一六〇）頃までには都に「今天王寺」が建立され、熊野、日吉信仰とともに天王寺信仰も盛んであったことが窺える。

今天王寺を建立した美福門院と西行との直接の交流は確認できないが、次のような西行歌が残されていて興味深い。

◆『西行法師家集』雑、九二番

美福門院の御骨、高野の菩提心院へ渡させ給ひけるを見たてまつりて

今日や君おほふ五の雲晴れて心の月をみがき出らん

永暦元年（一一六〇）十一月二十三日に崩御した美福門院が御骨となって女人禁制の高野山にお渡りになることができた。これこそまさに往生の素懐を遂げられたと喜んでいる西行だが、美福門院も鳥羽院とともに度々四天王寺を参詣し、前述したように西門の念仏衆にも加わっていた（注★51）。両者に共通するものとして四天王寺を挙げることは可能だろう。

今天王寺創建にかかわった聖心こと仏厳房は、醍醐寺理性院流祖賢覚付法の弟子の一人として血脈に名前が見えるが、その中に西行の心友である西住の名前も見える（注★52）。そして、仏厳房聖心は高野山の大伝法院の第十一・十八代学頭でもあったという（注★53）。また、『聞書集』にはこのような歌も見られる。

醍醐に東安寺と申して、理性房の法眼の房に罷りたりけるに、俄に例ならぬことありて、大事なりければ、同行に侍りける上人達まで来あひたりけるに、雪の深く降りたりけるを見て、心に思ふことありてよみける頼もしな雪を見るにぞ知られぬる積もる思ひのふりにけりとは（一三三番）

返し　西住上人

さぞな君心の月を磨くにはかつがつ四方に雪ぞ敷きける（一三四番）

「理性房の法眼」とは西住の師賢覚のこと。その房を西行は訪れて、急病に見舞われる。見舞いに来た「同行に侍りける上人達」の中に仏厳房聖心がいたかは不明だが、可能性はある。結局、今天王寺と西行を直接関連づける史料はないが、美福門院、醍醐寺理性院流との縁を考えると、無視できない。

このような四天王寺信仰が盛んだった時期に、西行も四天王寺を参詣している。家集には四天王寺の略称「天王寺」を詞書に記す歌が七例見いだせる。

(1)『山家集』雑、七五二、七五三番

天王寺へ参りけるに、雨の降りければ、江口と申す所

に宿を借りけるに、貸さざりければ
世の中を厭ふまでこそ難からめ仮の宿りを惜しむ君かな
返し
家を出づる人とし聞けば仮の宿に心とむなと思ふばかりぞ

(2)『山家集』雑、八五三番
同行に侍りける上人、月の頃天王寺に籠りたりと聞きて言ひ遣はしける
いとどいかに西へ傾く月影を常よりも異に君慕ふらん

(3)『山家集』雑、八六三番
天王寺へまゐりて、亀井の水を見て詠みける
浅からぬ契りの程ぞ汲まれぬる亀井の水に影映しつつ

(4)『山家集』雑、一〇五四番
俊恵、天王寺に籠りて、人々具して住吉にまゐりて、歌詠みけるに具して
住吉の松が根洗ふ波の音を梢に懸くる沖つ白波

(5)『山家集』雑、一〇七六番
天王寺へまゐりたりけるに、松に鷺のゐたりけるを、月の光に見て
庭よりも鷺ゐる松の梢にぞ雪は積もれる夏の夜の月

(6)『山家集』雑、一〇九六a番
天王寺へまゐりけるに、交野など申す渡り過ぎて、見晴るかされたる所の侍りけるを問ひければ、天の川と申すを聞きて、宿借らむといひけむこと思ひ出だされてよみける
あくがれし天の川原と聞くからに昔の波の袖にかかれる

(7)『西行法師家集』雑、一一七番
中納言家成、渚の院したてて、程なく壊たれぬと聞きて、天王寺より下向しける次いでに、西住、浄蓮など申す上人ともして見けるに、いと哀れにて、各々述懐したるに
折につけて人の心の変はりつつ世に有かひも渚なりけり

(1)(6)(7)歌は四天王寺参詣の途中での詠歌、(2)は西住と推測される四天王寺に籠もっている「同行に侍りける上人」への贈歌、(4)は四天王寺に籠もっていた俊恵に同行して住吉社に参詣した折の歌である。西行が四天王寺で詠んだという歌は(3)(5)の二首のみであるが、(5)歌は、夜、庭の松に止まった鷺の白さを雪に見立てた感興を歌にしたものだろう。四天王寺参籠時、同行たちと歌会などをした折のものであろうか。

(1)〜(7)歌中で、西行の信仰心と絡めて読み解くべき詠歌は(2)歌と(3)歌である。まず、(2)歌は、西行の同行西住が九月頃であろうか、四天王寺に参籠している折に贈った歌と考えられる。

四天王寺西門には彼岸の中日に西に沈む夕日を眺め、日想観を修する人々が集う。また、念仏堂では毎年九月十五日に大規模な念仏会が行なわれ、鳥羽法皇ほか、皇族、貴顕も都から参列し、天王寺楽人が舞楽を披露したりしていたという(注★54)。そのような折、夜になって天空を西に向かい、ひときわ澄みわたる満月は、極楽往生の確かな標であった。四天王寺の地にあってそれを眺めている西住、西行は都にいたのであろうか、あるいは高野山にいたのだろうか。そこに自分がいないことを西行

はどれほど悔しがっていたことだろう。

そう考えた時、(3)歌にある月影を「常よりも異に君慕ふらん」という言葉は、四天王寺での満月を極楽往生の証と喜ぶ西住ではなく、それを遠くで想う西行自身の憧れが込められていると見ることもできる。

(3)歌は、四天王寺境内に涌く霊水亀井を詠んだものである。亀井は摂津国の歌枕で、四天王寺境内から湧き出ている井水。金堂のなかにある青竜池の水が導かれて、太鼓楼の右にある石亀形水盤の亀の口から出るので名付けられたという(注★55)。

平岡定海は、この亀井を『四天王寺御手印縁起』が記す青龍信仰と絡めて次のように解釈している(注★56)。

次に御手印縁起の荒陵池の問題である。この縁起で「号二荒陵池一其底深、青竜恒居処也」この(ママ)青竜の信仰は、この縁起の作成された時には、この寺の別当職が、台密系の別当職でなく、東密系の別当であったことから、これは青竜寺に住して、青竜信仰をもって帰って来た空海の思想系統を引く縁起と考えるのが至当であろう。ことに「以二丁未歳一始建二玉造岸上一、改二点此地一、鎮二祭青竜一、癸丑歳、壌二移荒陵東一」とあることは四天王寺を移建したときにこの地が青竜を祭るに適した土地であったことを示している。…中略…この荒陵池が青竜の恒居であることは、海岸を目前にあるこの寺の位置からも適切な思想であり、ことに弘法大師が帰国の途次、海上で青竜に海上平安を祈られたという青竜への祈願にもとづいて四天王寺の場合にもあてはめて、海信仰を提唱する思想が生れた。

平岡の言う青竜信仰を(3)歌に認めることは難しいが、亀井の水から「浅からぬ契り」を感じた西行である、この歌には深い亀井への信仰心があふれている。その信仰心とは聖徳太子に対する信仰だと考えられる。それは『高山寺明恵上人行状(上山本)』にある次の記述から推測できる(注★57)。

上人、昔、十四、五歳の頃、天王寺に詣で、亀井に対ひて、太子化現の霊水たることを思ひてこれを飲む。

明恵上人は十四、五歳の頃、天王寺の霊水亀井に向かって、これこそ聖徳太子の化現として飲んだという。このような、亀井の霊水と聖徳太子信仰を暗示するのは、次の弁乳母歌も同様である。

◆『後拾遺集』(第十八、雑四、一〇七一番)

天王寺に参りて、亀井にてよみ侍ける

万世を澄める亀井の水はさは富緒川の流れなるらん

「富緒川の流れ」とは聖徳太子を暗示している。『日本霊異記』(上巻、第四)は次のような聖徳太子伝承を紹介している。

ある日、太子は路傍の病人を見て、声をかけ、衣服を与えた。やがてその病人が死に、太子は埋葬を命じる。ところが、その後、墓から遺体が忽然と消え、墓には歌が一首残されていた。

斑鳩の富緒川の絶えばこそ我が大君の御名忘られめ

富緒川の流れが絶えてしまったならば、太子の御名も忘れてしまいましょうが、そんなことは永久にありませんと、聖徳太子の徳を褒めたたえる歌だった。

もともと、この太子伝承は『日本書紀』推古天皇二十一年（六一三）条に見える片岡山飢人伝説で、太子は「聖」と讃えられていた。また、太子は後に慶滋保胤が書いた本邦初の往生伝『日本往生極楽記』の冒頭に載せられたことで、「日本最初の浄土往生人」としても認知されるようになったという（注★58）。

前出の『日本霊異記』所載歌を踏まえた弁乳母歌は、亀井と富緒川をどちらも聖徳太子の遺徳を汲む同じ流れと見ている。

(3)西行歌も、「日本最初の浄土往生人」である太子と、「西に行く」という名を負った自身との浅からぬ因縁を思っての詠歌と解釈することもできるだろう。

これら以外に天王寺とは断定できないが、天王寺のある難波に西行がしばらく滞在していたことを示す歌も残っている。

(8)『山家集』春、八番（注★59）

難波辺に年越しに侍りけるに、春立つ心を詠みける

いつしかと春来にけりと津の国の難波の浦を霞こめたり

いつの間にか春が来たよ、難波の海に霞がたっているという立春の心を詠む(8)歌は、心情的には、同じく『山家集』にある次の(9)歌と対になっていると思われる。

(9)『山家集』冬、五五九番

※「冬歌十首よみけるに」のうち三首目

津国の蘆の丸屋の寂しさは冬こそ分きて訪ふべかりけれ

寂しく厳しい冬があったからこそ、春の訪れは嬉しいものなのだ。しかし、西行の心の目には霞む難波の海の向こうに見えるものがあった。

◆『夫木和歌抄』（第三十四、雑部十六、一六三四〇番）

天王寺にて、病かぎりになりにける最後の歌七首中

難波の海雲居になして詠むれば遠くも見えず弥陀の御国

時代は下るが死を覚悟した藤原家隆が残した歌だ。西にある弥陀の国に行くことを願った西行にとっても、難波の海の向こうには、西に行くことを願った自身の行くべき弥陀の国が望まれたのであろう。

おわりに

以上、義清（西行）の出家が菩提心（道心）によるものと仮定し、そのきっかけとして保延六年にあった西念入水往生事件を想定し、西行と四天王寺西門信仰との関係を推測してみた。論としては仮説に仮説を積み重ねた累卵のようなものであるが、西行と四天王寺念仏衆、あるいは西門信仰を裏付ける決定

的な史料が存在しない現状では致し方ない。

これは、四天王寺が度重なる地震、津波などの天災や、戦乱などの人災によって破壊、焼滅を繰り返したことで、多くの記録類が残されていないことにもよる。また、栄西が建久九年（一一九八）に著した『興禅護国論』に「先皇勅して、念仏宗を天王寺に置く、今尊卑の念仏は、この余党なり」と書いた四天王寺念仏とそれに集う人々（念仏衆）についても、確かな記録がなく、西行との関係を実証することは不可能である。願わくば、西念が記したような供養目録が他にも出てくればいいのだが。

最後に、後代のものであるが西行と四天王寺念仏宗との関係を示唆するものを紹介して擱筆としたい。

◆『雪玉集』巻第十五、六四六九番、

西門の念仏堂には、武庫山出現の弥陀三尊、太子の御筆いまに儼然たり、唐よりわたせる善尊大師等身御影も此ところにあり、眼精誠生身にむかへるがごとし、此堂になむ西行法師が座もありけるとかや、一とせの地震に砕け失せぬるよし答へ侍り、あはれなる事なり、

此本尊静かに拝見して

写しとめて闇をぞ照らす玉はやす武庫の山より出し光は

これは室町後期の三条西実隆（一四五五～一五三七）の家集にある一首である。この西門念仏堂の阿弥陀絵を写し、実隆が所持していたことは、中御門宣胤の日記『宣胤卿記』永正十六年（一五一九）五月九日条の記事で確認できる。

入道前内府（三条西実隆）所持の半身阿弥陀画像を借る。書写の事を（土佐）光信朝臣に仰せ遣はす。この本は天王寺西門の腋壁恵心僧都の画像の写しと云々（注★60）

従って、実隆が西門念仏堂を訪ね、「西行の座もありける」と聞いた話は事実であろう。これは十五、六世紀頃には西門念仏堂に何らかの西行伝承があったことを示唆している。

ただし、西門の念仏堂は西行円寂の翌年、建久二年（一一九一）九月十八日に火災により焼失している（『四天王寺年表』）ので、実隆の言う念仏堂はそれ以降に再建されたものである。西行自身が念仏衆に連なっていた証明にはならないが、後世の人が西門信仰のメッカ念仏堂に西行の座を設けていたというのは興味をひかれる。

西に行くということ、それは四天王寺西門から西にある海の向こう、弥陀の国へ行くということなのである。

参考文献

(1)目崎徳衛『西行』（吉川弘文館、一九八九年）
(2)目崎徳衛『西行の思想史的研究』（吉川弘文館、一九七八年）
(3)西澤美仁・宇津木言行・久保田淳『和歌文学大系21　山家集／聞書集／残集』（明治書院、二〇〇三年）
(4)『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川書店、二〇〇三年）
(5)新潮日本古典集成5『方丈記・発心集』（新潮社、一九七六年）
(6)新訂増補国史大系18『百錬抄』（吉川弘文館、一九八一年）

(7)①吉川弘文館『国史大辞典』、②平凡社『日本歴史地名大系』、③講談社『日本人名大辞典』はジャパンナレッジを活用した。(http://www.japanknowledge.com)

(8)三宅米吉・津田敬武著「院政時代の供養目録」(『帝室博物館學報』4册、一九二四年)。なお、同書は勉誠社文庫9『極楽願往生歌』(一九七六年)として改題複製され、本稿はこれを参照。

(9)井上光貞『新訂　日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九七五年)。ただし、本稿は『井上光貞著作集(第七巻)』(岩波書店、一九八五年)を使用し、ページも同書による。

(10)出口常順「四天王寺の歴史」(『秘宝=第三巻　四天王寺』講談社、一九六八年)

(11)田中文英「十一・二世紀における浄土教の展開—四天王寺を中心に—」(『ヒストリア』54号、大阪歴史学会、一九六九年十二月)

(12)棚橋利光編『四天王寺年表』(清文堂出版、一九八九年)

注

(1)目崎、参考文献(1)、二十二頁から本文引用。

(2)橋本義彦『藤原頼長』(吉川弘文館、一九八八年、二九、六〇頁)

(3)角田文衛『待賢門院璋子の生涯』(朝日新聞社、一九八五年、二七四頁)

(4)参考文献(6)『百錬抄』をもとに、私に読み下した。なお、目崎、参考文献(2)(八九頁、注(1))が指摘するように、該当部は神宮文庫本では単に「西行法師出家廿三」となっている。『百錬抄』の諸本は、吉田定房と万里小路宣房とが所持していた写本を、嘉元二年(一三〇四)、金沢貞顕が借用し書写校合した金沢文庫本が、諸本の祖本になっているが、この祖本は現存せず、神宮文庫所蔵の旧宮崎文庫本がその忠実な模写本として知られているという(『国史大辞典』)。となると、「十月十五日」という日付は、後世の潤色と見ることもできる。なお、大野順一(「西行の出家〜命なりけり考〜」(『文学』一九八六年十月))は、『百錬抄』が「右兵衛尉」という、それほど身分の高くない義清(憲清)の出家を記録していることに疑念を抱いている。

『百錬抄』には、西行以外にも同時期に出家の記録が、次のように三例あるが、いずれも高貴な人物である。

①保延六年(一一四〇)十月二日…前摂政・関白藤原忠実

②永治元年(一一四一)三月十一日…鳥羽上皇

③永治元年(一一四一)五月五日…鳥羽皇后で忠実娘高陽院藤原泰子

ところが、保延四年(一一三八)に出家した従五位上左衛門佐藤原基俊のことは、『百錬抄』には記録されていない。彼は歌人・歌学者・歌合判者として活躍し、『金葉集』以下の勅撰集に百首以上入集する、当時、歌人としては西行よりも高名な人物である。それに対し、目立った活躍もしていない、身分の低い一介の若者である義清(憲清)の出家が記録されているのは不審である。

その理由を大野はこう述べている。

当時は飢饉をはじめとして種々の災害が頻発し、…中略…百錬抄によるかぎり、保延年間に吉事賀事はなく、むしろ人心の不安をかきたてる事件の方がめだつてゐる。さうしたなかでの異常現象が、畏怖とともに人びとの関心を強く惹いたで

あらうことは、推察するに難くない。おそらく西行の出家も、それらの異常現象と同じやうなセンセーショナルな事件として、けつしてとるにたらぬ出来事ではなかつたのである。

確かに、『台記』『百練抄』などの史料から、義清の出家が当時は大事件で、大いに世間の耳目を集めたことは確かであろう。しかし、それが大野の言うような、「異常現象と同じやうなセンセーショナルな事件」であったのなら、『台記』が評した「人これを嘆美するなり。」とは合わず、首肯しがたい。

(5) 下西善三郎『西行 長明 受容と生成』(勉誠出版、二〇〇五年、一七三〜四頁)なお、川田順「西行伝」は、古典日本文学全集第21『実朝集・西行集・良寛集』(筑摩書房、一九六〇年)所収。

(6) 山木幸一『西行和歌の形成と受容』(明治書院、一九八七年、二一〇頁)

(7) 以下、『発心集』本文は、参考文献(5)から引用。ただしルビは私に適宜省略した。

(8) 三木紀人は、重源による大仏供養は三度あったが、この説話の主人公斎所聖寂阿弥の没年が建久六年(一一九五)なので、文治元年(一一八五)以外ありえないとしている。(参考文献(5)『発心集』、三三四頁、頭注)

(9) 吉本隆明「西行論」(講談社文芸文庫『西行論』(一九九〇年、六五〜六八頁。初出は雑誌『海』一九七六年八月号(中央公論社)に「僧形論(4)〜西行〜」として掲載)。以下、その本文。

伝説西行の出家の動機から、虚像をすべてひき剥すとなれば、依然として無動機の出家しか心に当らない。幼少から内向的で時代の思想に敏感なひとりの青年を想像すれば、かれはいつも出家遁世を心に忘れたことがなかったとしてよい。名利と愛憐の絆を捨てて、浄土を目指すことは、おおきな時代思想のひとつであった。僧侶概念を階層から切りはなし、学問修行の問題から思想的な実践の問題へと転化させたのは、横川にこもって念仏を提唱した源信が最初であった。この実践的な姿勢は、西行の生い立った時代には、貴族階級と接触する武門をとらえるまでにはなっていたのである。これが庶民をとらえるには、法然の出現までまたなければならない。こうかんがえると、時代思想として、出家遁世を実践しようとする姿勢が、鳥羽院の親衛であった西行をとらえる契機は、それほど不自然でなくあったとかんがえてよかった。かれは、身辺の動機なしにも、時代思想に敏感で、すべてに多感でありさえすれば、充分に出家遁世に踏みきる根拠をもっていたのである。出家は、いわば、平安末から鎌倉期にかけての前衛的な思想であり、僧形は、ある意味で前衛的でもあった。青年が流行の思想に踏み込むのに、いつの時代でも、さしたる個人的な動機が必要なわけではない。そういう意味では、西行の出家を時代思想に埋没させても、よいようにおもわれる。西行の出家の動機を類推するのに ふさわしい挿話が、「発心集」にひとつだけ存在している。

…(発心集の説話部分につき略)…

この挿話の主人公は、「家富み」という境涯といい、武門という階層といい、出家の無動機といい、ほとんど『台記』に記載された西行に生き写しといってよい。また、西行の編著に仮託されに『撰集抄』は、この種の出家と往生の態様に、

いつも憧憬の情をよせている。そうだとすれば、この挿話には、時代思想のひとつの極限がしめされていた、とみてよい。こういう出家の仕方と、往生の仕方は、若い西行を動かしたかもしれない。「家門は富み年齢は若く、心に愁いなどないの」だという「台記」の記載の仕方は、あるいは『発心集』の記載とおなじように、時代の類形的な見方を象徴しているのかもしれないが、〈事実〉としてうけとれば、西行の境涯に酷似していた。だが、西行は、おなじように真言浄土の思想に動かされながら、この挿話の主人公と対照的な生きざまをたどった。ここに、本質的な意味で、西行の出家の問題があったといってよい。

吉本は、義清（西行）の出家を当時流行の前衛的思想のようなものと捉えているが、そういった流行かぶれのような、軽薄で表面的な心情で出家をしたとしても、その気持ちは長く続くものではなく、広く世人の評価も得られず、首肯できない。

(10) 五味文彦「佐藤義清の出家」（『国文学』第三十九巻八号、一九九四年七月）

(11) 『新訂増補国史大系 第53巻・公卿補任 第一篇』・『同 第54巻 第二篇』（吉川弘文館、一九六四年）

(12) 『新日本古典文学大系40 宝物集』（岩波書店、一九九三年）から引用。

(13) 以下、西行歌は、特に注記がない限り、本文、歌番号ともに参考文献(3)から、適宜、漢字に変換したり、ルビや記号を付けたりして引用した。

(14) 空仁は生没年未詳、俗名は大中臣清長。少輔別当入道、神祇少副入道ともいう。法名は空人とも書く。（『日本人名大辞典』）

(15) 五味、前掲注 **(10)** 論考。

(16) 参考文献(6)『百錬抄』

(17) ①目崎徳衛、参考文献(2)（一二三頁）、②山田昭全『西行の和歌と仏教』（明治書院、一九八七年、二二四～五頁）。

(18) 新古今和歌集（巻二十、釈教歌）

人の身まかりにけるのち、結縁経供養しけるに、即往安楽世界の心をよめる　瞻西上人

昔見し月の光を標（しるべ）にて今夜や君が西へ行くらん（一九七七）

観心をよみ侍りける　西行法師

闇晴れて心の空に澄む月は西の山辺や近く成るらむ（一九七八）

(19) 目崎、参考文献(2)（一三一頁）

(20) 三宅・津田、参考文献(8)

(21) 三宅・津田、参考文献(8)（二頁）

(22) 中田祝夫「極楽願往生歌～院政時代語史料 影印と釈文～」（『国語展望』二十三号、一九六九年十月）の釈文を参照し、適宜漢字など表記を私に改めた。

(23) 中田、前掲注 **(22)** 論文の読み下しを参照し、漢字には私にルビを付けた。

(24) 五味、前掲注 **(10)** 論考

(25) 山田、前掲注 **(17)** ②書（二五〇頁）を参照して、『栂尾明恵上人伝（興福寺蔵本）』（高山寺典籍文書綜合調査團編『明恵上人資料第一』（東京大学出版会、一九七一年、三〇二頁）を、私に適宜句読点を補い、ルビを付けて読み下した。

(26) 三宅・津田、参考文献(8)（二二頁）の読み下し参照。

(27) 三宅・津田、参考文献(8)（五三頁）永治二年（一一四二）供養目録の該当部。

右伝聞天王寺之西門者極楽之東門通
然則不死期命終之時待而去保延六年
庚申八月九日庚辰彼岸之内後世菩提之
料仏経供養之日即御寺西海数年勤行
供養若干仏経目録懸頸向西方…以下略…

(28) 新潮日本古典集成31『梁塵秘抄』（新潮社、一九七九年）

(29) 平岡定海「『四天王寺御手印縁起』の性格について」（『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』六号、一九六四年七月）は、次のように解釈している。

「昔釈迦如来転法輪所」という思想は、もともと釈迦仏が法輪を転じて説かれた勝鬘経を聖徳太子がここで講ぜられたという考え方から発展して、聖徳太子の講経の事よりも、釈迦如来の転法輪した所という思想を構成するほうがより宗教的発展を期する上に必要となったためであろう。

(30) 梅谷繁樹「四天王寺西門信仰をめぐって」（『仏教文学』3号、一九七九年三月）は、四天王寺の海での実際の入水往生の歴史として四人挙げている。①金峰山千手院住僧沙門永快（『拾遺往生伝』）、②台嶺住侶沙門行範（『後拾遺往生伝』）、③山城国厳間寺正法寺常住誓源（『続古事談』）、④娘に先立たれた尼（『発心集』）。〔上記四名の表記は『四天王寺年表』参照〕

(31) 井上、参考文献(9)第三章第二節四「四天王寺念仏」

(32) 出口、参考文献(10)

(33) 田中、参考文献(11)

(34) 参考文献(12)『四天王寺年表』

(35) 出口、参考文献(10)（八頁）

(36) 田中、参考文献(11)（四十四頁）

(37) 『台記』康治二年（一一四三）十月十八日、同記久安二年（一一四六）九月十一日、同三年（一一四七）九月九日、同四年（一一四八）五月八日、『兵範記』仁平二年（一一五二）九月九日など。（『四天王寺年表』参照）

(38) 出口、参考文献(10)（六頁）

(39) 四天王寺と極楽の位置関係については植木朝子が「四天王寺西門信仰と今様～『梁塵秘抄』一七六番歌をめぐって～」（『日本歌謡研究』四七号、二〇〇七年十二月）で詳しく述べている。

(40) 出口、参考文献(10)（七頁）

(41) 栄花物語の本文は、日本古典文学大系76『栄花物語　下』（岩波書店、一九六五年、三五二～三頁）から引用。

(42) 今昔物語は、日本古典文学全集21『今昔物語集(1)』（小学館、一九七一年）原文の漢字片仮名混じり文を漢字ひらがな文に直し、適宜読みやすいように変えて引用した。

(43) 井上、参考文献(9)（二六八頁）

(44) 井上、参考文献(9)（二六九頁）

(45) 小原仁（おはらひとし）「仏厳房聖心とその周辺」（速水侑（たすく）編『奈良・平安仏教の展開』吉川弘文館、二〇〇六年、二二三頁）

(46) 和歌は『新編国歌大観』から引用した。なお、本文は適宜、漢字に変換し、ルビを付けて表記した。また、①相模歌は詞書「天王子」を「天王寺」に変更した。

(47) 阿部泰郎「聖徳太子信仰」（『聖徳太子事典』（柏書房、

一九九七年、四三三～四頁）

(48)『百錬抄』永暦元年（一一六〇）十月十六日条など。

(49) 増補史料大成29『吉記』（臨川書店、一九六五年）の本文を私に読み下した。

(50) 普成仏院については小原、前掲注(45)論考、ならびに高橋慎一朗「仏名院と醍醐寺三宝院」（『東京大学史料編纂所研究紀要』6号、一九九六年三月）が詳しい。

高橋は普成仏院の位置について、『拾芥抄』所収「東京図」をもとに、「六条以南、佐女牛以北、朱雀以東、坊城以西の一町…現在の山陰本線丹波口駅の北、壬生寺の南にあたる。」と推定している。しかし、六条（現在に同じ）、佐女牛（現在、花屋町）、朱雀（現在、千本）、坊城（現在に同じ）は、丹波口駅のすぐ東南、京都市下京区西新屋敷中堂寺町、同西新屋敷下之町の地となるだろう。なお、『東京大学史料編纂所研究紀要』はネットで公開されているものを参照した。

（http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/publication/kiyo-j.html）

(51)『四天王寺年表』によると美福門院四天王寺参詣は、①久安六年（一一五〇）九月、②仁平元年（一一五一）九月、③仁平二年（一一五二）四月、④久寿元年（一一五四）九月と四度ある。

(52) 醍醐寺文化財研究所『研究紀要』第1号（一九七八年）所収、築島裕（翻字）「醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脈』」（六二頁）。なお、この血脈の醍醐寺僧中には行鑁「天王寺念仏三昧院」、寛幸「天王寺念仏堂院主」という名前も見える（四五頁）。

(53)『国史大辞典』「聖心（しょうしん）」の項目。

(54) 田中、参考文献(11)（四七頁）

(55)『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）「亀井」の項目（三村晃功執筆）。

(56) 平岡、前掲注(29)論考。ただし、原文「以二丁未歳一」の部分、「以二」の字が脱落していたので補って引用した。

(57) 前掲注(25)『明恵上人資料第一』（一二二頁）を私に読み下した。

(58) 阿部、前掲注(47)論考（四三六～九頁）

(59) 初句「いつしかも」は、『国歌大観』などの本文をもとに「いつしかと」に変えて引用。

(60) 続史料大成22『宣胤卿記3』（臨川書店、一九六七年）を私に読み下した。

付記

本稿は第二回西行学会大会での研究発表と、祭祀史料研究会での例会発表の原稿をもとに、推敲したものです。席上にて頂いたご教示、ご意見に改めて謝意を申し上げます。

なお、本稿脱稿後、慈円和歌研究会『慈円難波百首全釈』（風間書房、二〇〇九年、九一～二頁）が、以下の一首も西門信仰との関連を指摘していることを知ったので、末尾に記しておきます。

◆（『新編国歌大観』第三巻所収『拾玉集』二八〇五番）

嬉しきも憂きも集まる門を出でてひとり行く人の道しるべせん

（やまむら・こういち／テュービンゲン大学同志社日本語センター）